

# 興野町セツルメント報告

## 生活問題研究会

福祉活動部

まえがき

松本武子

私どもの地域サービスの焦点であった桜楓会托児所が戦災でなくなつてから、科の学生さんの地域サービスの活動はその場をあちこちに求めて動いた状態であつたが、昭和卅五年春正式に科と興野保育園長との話し合いがあつて保育園の一部にミセットハウスを建てさせていただいて以来二年間、学生さんの福祉活動は該保育園の周辺をめぐる活潑に動いてきた。その活動は単に「奉仕」という感情のみに動くものでなく、いかにして地区の人々に健康な生活への意欲的發展に関心をもちたせるか、いかにして子どもをそれら底層の環境のなかにあつても彼等がよい子として育ち、健康な将来を夢みるように生活させ得るか、いかなる態度や方法によつて子どもや母をわれわれの計画するクラブに集めるか、そして彼等のなかに、またわれわれと彼等の間に人間関係をいかに強めるか、等々の研究課題への努力と技術的研究によつてすすめられた。しかも無から有を生じるといつてもよいこの興野保育園周辺への奉仕活動は学生にとつて生易しいものではなかつた。この仕事にあつた学生は、時間と距離に制約されながら懸命に努力し、あるときはよろこびあるときは

嘆き、対象の変化成長をみつめながらそれと一如になつて動いてきた。徹夜の夜、炎暑の真昼、学業の余暇に足立区に往復しチームになつて貢献してきた学生さんの苦勞は本当に大変なものであつたと思う。現在の学生の奉仕活動の基盤をつくつてゐるのは卒業生の貢献された基金があつて、陰に陽に先輩諸姉の支援はたえずつづいてゐる。資金なくして何の活動をなし得たであろうか。実にこの足立区における奉仕活動は日本女子大学社会学科の過去より現在にそして未来に連なる活動である。

また第二に、不手際も多く、迷惑もかけたであろう学生のしごとを、つねに寛らかに庇護し、地域と学生との交流をたすけて下さつた佐藤保育園長夫妻に感謝と尊敬とを表したい。二年間学生が希望を失わずこの活動をつづけてきたことは夫妻の協力に負うことが多い。

最後に、学生の蔭になつてこの活動をたすけられた研究室の先生方の努力が並々のものでなかつたことを伝えて心から感謝する。老人クラブには前田栄さん、子どもクラブには始めに吉沢英子さん、それから沢村美佐子さんから現在の柴田英子さんにバトンがわたされ、図書クラブにはポランティアの鈴木菊子さんから田宮良子さんへと、そして一切の事務担当には一番ヶ瀬康子さん、それぞれ蔭役が一体となつてこの足立区の学生の活動に貢献されたのである。

その他学内外のこの奉仕活動への協力は大きかつた。殊に本学における附属校の理解と協力は社会学科に大きな支援である。

以下はそれら一切の恩恵の故に過去二年間に積重ねられた学生の体験記録を報告するものである。

## 一、興野町セツルメント がでけるまで

日本女子大学社会学科興野町セツルメントが科の実習分室として発足してから約一年半になる。今日の活動が社会学科の長い地域活動の歴史の継承であることを思うとき、その意義づけのためには先輩たちの活発な活動の歴史をふりかえつてみなければならぬ。

戦前まで、日暮里にあつた桜楓会託児所初代主任丸山千代氏（教育学部二部六回生）が本学科の唯一の実習の場であり、代々の学生はこゝで主任の指導のもとに実習をし、また、ことあるごとに、活発な奉仕活動がなされてきた。この託児所の資金にと、当時の寮生全員が月々五銭預金をして協力した。一方、本学内でも毎日曜日に子ども会を開き、学校周辺の児童の余暇指導、健全育成に努めた。これには科の全員が参加したといわれる。この二つの活動も、校内子ども会は親しくなつた子どもたちが校内に入り出して教室のガラスを割つたりすることから、中止の止むなきに至り、桜楓会託児所も戦火により焼失したため活動の場を失つた。

その後大東亜戦争争い、戦後にかけて国家混乱の時期には子ども会活動もすべて中断されていたが、本学が新制大学となり、世の中も落ち着いてきた昭和二十七年頃から、豊島区高田南町の南蔵院という寺に場を得て、再び活動が始められた。この会は子どもたちにより「若葉子供会」と名づけられ、児童の健全育成並びに学生の実践の場として、レクリエーションを主としたプログラムをもつて活動がなされた。その後、寺院への迷惑その他の事情により南蔵

院子ども会は中止されたが、学生はたえず場をもとめ、雑可ヶ谷教会、戸山アパート保育園、日の母子寮（生活保護法による宿所提供施設）、早稲田奉仕園の四ヶ所において次々と場をかえて若葉子供会の奉仕活動は継続された。一方、昭和三十四年より僻地の子どものために、夏休みを利用して、岩手県下閉伊郡岩泉町並びに田老町において巡回子ども会を開始し大きな成果をおさめており、前記四ヶ所のうち、現在も続けられている日の母子寮における子ども会とともに、現在の若葉子供会の主たる活動となっている。

こういう活動が行われてきたが、是非とも科としての実習の場を持ちたいという願いは強く、次々と在校生に受け継がれていった。そして、そのための基金募集が提唱され、「自分たちの代には間に合わなくとも、いつか後輩たちが持つことができるように……」という願いによって、昭和二十五年第一回の基金募集がなされ、以来十年余、毎年四年生が卒業期に自主的に開催する音楽会によって基金は積み重ねてきた。この数年来、基金もある程度の額に達しそろそろ始めてはとの卒業生の声と、学生間の「お金はなくともしてみたい」という強い希望によって、実習分室としてのセツルメントを開始することと決定、研究室において敷地、建物等の設立準備に手がつけられた。そんな時、一番ヶ瀬康子助教と同級の興野保育園々長佐藤利清氏夫人佐藤道子氏（家政学部三類四十一回中退）を知った。佐藤利清氏夫妻は、足立区興野町において保育園経営という仕事以外に地域社会への福祉のためには殆んどすべての活動の中心となっている方であった。夫妻の招致により、地域を知るために研究室一番ヶ瀬、江口

両先生、園長夫妻、保育園保母、地域の母親九名との話し合いの会をもったのが三十五年三月であった。内職によってやっと生活していること、病気をするとたんに生活に困ること、本を読みたいけれどたまたまに週間誌を買う程度の余裕しかないこと、また、子どもの勉強も全然みてやれないので、保育園で以前は小中学生の勉強会を行っていたが保母の負担になるのでやめていること等々が話合われた。その後地区の小中学校、パタヤ部落などの実態をみられた結果、(1)興野町が非常にニードが高いところであること、(2)他のセツルメント活動がおよんでいないこと、(3)佐藤夫妻という有力な協力者があること等を考慮して保育園を借りて一応三年計画で始めることに決定、四月十六日、菅科長、篠崎、江口、松尾、松本諸教授その他研究室全員が保育園へ出向き、実地視察の上正式に学生の福祉活動に協力をうけることに決定した。次いで、四月十八日、前記の話し合いの結果を中心に女子学生に可能なことという点も考慮して次のような活動方針が作成された。

- 1 興野保育園（足立区興野町八四）内に日本女子大学社会福祉学科実習分室をおく。ミゼットハウス（堤康次郎氏寄贈）を設置する。
- 2 子ども会（週一回）、母子図書館（週一回）、老人クラブ（月一回）、母親向け講演会（月一回）の活動により開始する。

この活動方針に基づき各クラブは学生の参加を募り準備に入った。

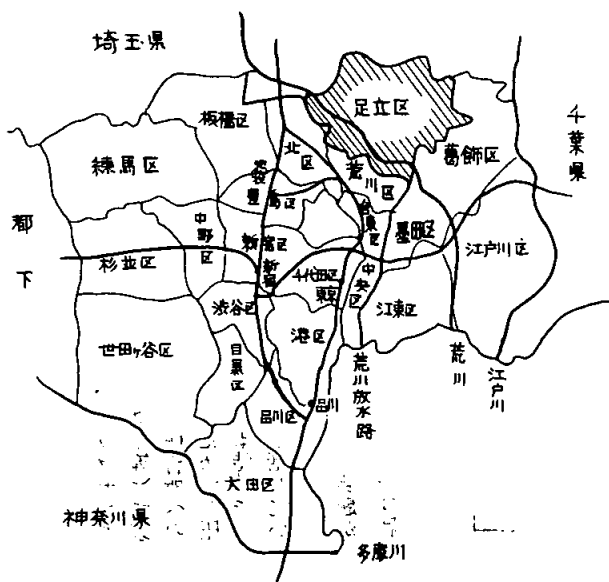
子ども会は日の母子寮、早稲田奉仕園、岩手巡回子ども会と三ヶ所で活動していた当時の若葉子供会の中の一グループという形で出発し、地域の要望により学習を中心とする活動が六月七日より始めら

れた。  
母子図書館はミゼットハウスを館とし鈴木菊子氏（本学科四十六回、慶応大学図書館学科卒）に協力を求めて全般的指導を仰ぎ、八月二十四日開館の運びとなった。

老人クラブは吉田栄専任講師（旧姓前田）を中心準備を進め、九月十六日に開いた保育園児の祖父母を対象とする講演会「孫を教育する」を初回として活動を開始した。  
このようにして三クラブが時を前後して活動を始め、今日に至っている。

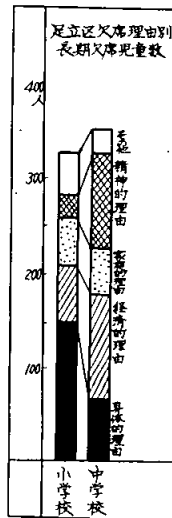
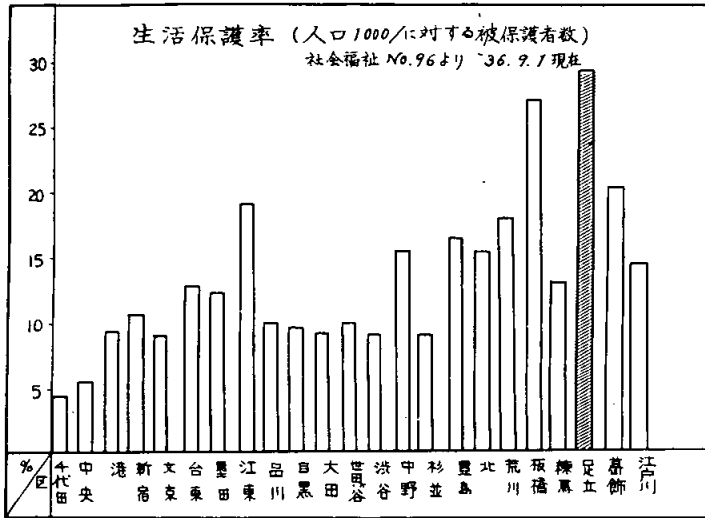
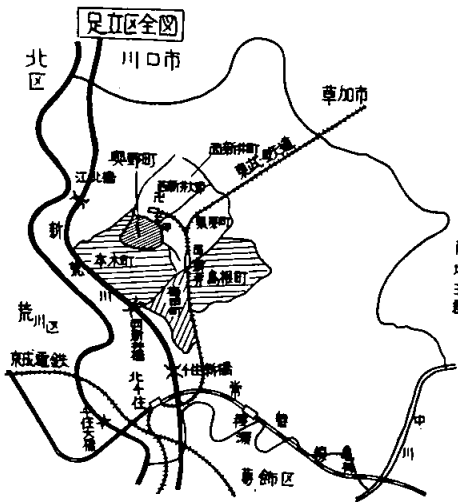
## 二、足立区とは、興野町とは

一 その地域性とニード  
こうして多くの卒業生と学生と研究室の先生方の

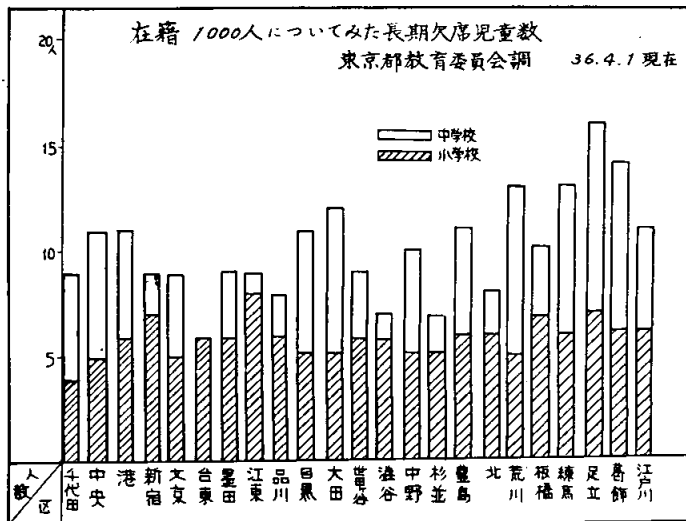


念願と努力によって、実習分室としてのセツルメントは設置された。こゝで、その地域の特色をみてみよう。

先ず、足立区とは、人口、四〇八、〇一五人、面積、五三・二五K<sup>2</sup>、住民は東北及び関東近県から流入してきた人が多く、大正十二年の関東大震災によりそれまで都の三貧民窟の一つといわれた下谷万年町が焼かれ、その一部が移り住んだ人もいる（本木スラムはその名残りといえよう）。現在においても残された農地をめぐって、夥しい流入が起っており人口増加が著しい。産業も昔の農業から、現在は中小企業、零細家内工業に変わりその下請内職が多いことは大きな特徴である。そして一人平均納税率が区内最低で生活保護率が最も高いことにも示されるように、区内唯一の「貧乏区」といえよう。そういう地域性を反映して児童長欠率も区内一であり、特にその理由を他区と比較した場合、経済的理由、精神的理由が多いことは注目すべきであろう。



次いで、最も緊密な関係をもつ興野町とは、スラム街のある本木町と朝鮮人の多い梅田町に隣接し、ポーターライン層が広く存在する町といえる。人口約一万五千、住民は家内工業、工員、商店主、中小企業のサラリーマン、農業等の職をもち、



殆んど家庭では内職仕事（主として、ヘップサンダール、革の型押し、ホック、玩具、ライター等）で家計を補ってぎりぎりの生活をしている。保育所への措置児も多く、その理由として「内職のため」が圧倒的な数を示す。身体障害者の多いことも特徴で、その多くが中小企業の下請や内職により生活しているといわれる。

以上のような状態で、そこには数限りない問題が存在しセツルメント活動のニードはすべての年齢層にあると考えられる。

### 三、福祉活動の現状

#### A 子ども会

a 今日までのあらまし

昭和三十五年四月、社会福祉学科若葉子供会のメンバーによって開始されることになる。先ず計画を具体化するための準備として、地域及び児童に関する概略の知識をつけ、ついで保育園々長夫妻との懇談会をもって子ども会の形態、対象、会費等について話合った。さらに如何なる方法によって地域に連絡するかについて検討し、保育園において「お楽しみ子ども会」を開催し、子どもたちに主旨を説明、希望者を募ることとした。子ども会の開催については①地域にポスターをはる②地域の小学校（西新井小学校）にプリントの配布を依頼することとした。

対 象	活 動	時 間	会 費	人 数	
				学 年	児 童 数
小学校一―六年生	週 二 回	一回 一時間	月 額 三 十 円	3	10
				3	11
				3	11
				3	10
				2	5
2	7				
14	計	54			
小学校一―四年生	週 二 回	一回 一時間十五分	月 額 八 十 円	4	16
				4	10
				4	15
				2	2
				14	計
小学校一―四年生	週 一 回	一回 一時間三十分	月 額 四 十 円	3	7
				3	9
				2	9
				2	2
				10	計

六月六日、受付け、約五十名の児童をもって学習中心の子ども会が始った。七夕、夏休み製作会、クリスマス等特別プログラムを組み入れながら三十六年二月まで独自の活動を続けたが、次第に学生の間に「社会福祉学科セトルメント子供会としての性格づけが何らなされていない」との声が高まった。三十六年三月、セトルメントに活動する三グループが始めて集り、組織化の必要が話合われた。その結果、子ども会グループは、社会福祉学科若葉子供会から独立して、興野町セトルメント子供会として再出発することとなり、現在までの活動をつづけている。そして興野町子ども会プログラムは、当面するいろいろの支障や、子どもへの効果を考慮して次のような変せんを経てきた。

b ある日の活動から 三年生の記録より

○一月十八日(木) 晴 出席者八名

今日はバスが特によく揺れた。四時少し前保育園着。三年生はまだ一人も来てない。やがてK君が現われた。

「先生、まだ誰も来てないの？もうAさん学校に来てるよ。ね、迎えに行こうよ」と促すのでAさん宅に行った。(Aさんは骨折で三ヶ月休んでいた。) K君とリーダーが荷物を持つとAさんはまだ足をひきずっているが、一人で歩き出した。保育園にもどるとだいたい顔が揃っていた。今日は先週からの約束で、最初に遊ぶ。何をするか話合った結果、外でドッチボールがしたいということだったが、まだAさんができないことに気づきなぞに落着いた。

リーダーも加わり交代で出題。

リーダー「なぞなぞはこれで終りにしましょう」

K君 「僕に、もう一つだけやらして？」

みんな 「うん」

K君 「国会をハダシで歩くものなーんだ」

Rさん 「はだして？」

K君 「そうだよ」

Aさん 「ネコ？」

K君 「ちがうよ」

みんなしばらく考えたがわからない。

リーダー「みんなわかった？先生はこうさん」

みんな 「あたしもこうさん」「ぼくも」

K君 「えーとね、岸さん！はだして歩いてるだろ？これ本にのってんだ」

この後、教科書の「けんすけと子ぐま」の劇をした。配役を決めるのに大騒ぎ。てんでに役名を叫びあう。結局ジャンケンしたが負けて希望通りにならなかつ

たRさん、Sさんが「やんない」と云い出した。

「二人がやらないと他の人が困るのよ」と云つても受けつけない。

「じゃ二人は先生とお客さんになりましようよ」ということにしたが、Rさんは

「自分の好きなことやるのがいゝよ」と漢字の練習を始め、Sさんは

「あたし、暮やる」とリーダーのオーバーを持ってきて幕代りになった。一回終ると

「もう一回」ということで

「じゃ今度は役をかえてやつたら？」という、今度はRさん、Sさんも加わり全員でそれぞれの役を演じた。なかなかうまい。

その後、外でドッチボールを男女に分れて一回だけして終りにした。

今日はSさん姉妹を送り届けたら、お母さんが、「どうもすみませんねー、まあちよつと」と早速、座布団を出して下さったが「また、昼間伺いますから」と失礼した。次にK君兄弟と一、二年生三人を送つていき、バスに乗つたのは六時半だった。

リーダーのメモから

T君 机に向つての勉強時間は集中力がなくよく出歩くが、劇や絵には熱心である。出欠をとる仕事をはじめとしてリーダーが与えた仕事はよくやる。このような方面から彼の良さをひきのばしたい。

Rさん 我が強い。自分の思い通りにならないと勝手なことを始めるが、これが最近特に目立ってきた。他の子どもたちの前ではリーダーが話しかけてもぶつきらぼうな返事しかしないが、ちよつとした時にリ

ダーに話しかけてくる。

すべての子どもに対して、同じように、しかしそれぞれに応じた関係を作っていくことのむずかしさと必要性を常に感じる。グループワークにおける「公平な偏愛」ということが思い出される。

何事をするにもリーダーまかせだったのが、次第に仲間意識が強くなり、最近では何を決めるにもケンカをしたり怒つたり一度は大騒ぎをするが、全員で考え、判断し、決定するようになってきた。

この面の成長をさらにはかりたいと考える。

ケース記録から M君の場合

本人 男児七才(小一)。入学と同時に入会。乳

児院で育ち言語不明瞭、IQ七十八

家族構成 実父、継母(実母は結核で死亡)、

兄(小五)実母の連子、妹(四才)、

弟(三才)、妹(五ヶ月)以上三人は

継母の実子

○八月十六日(水)

入会以来ほとんど欠席なし。いたずらは相変らずだが、やつとリーダーにも慣れ今日は側へきて「ぜんせいばか」と書く。

ぜんせいばか、リーダーが自分にどんな態度を示してくれるかを試そうとするのか。つい嫌な顔をしてくらめつこしてしまつた。すかさず、「Mちゃんのおりこう」と書ける位のゆとりが

なぜもてなかつたか。

○九月二十一日(木)

K君のビストルを取り上げ「十円くれ、玉買つてくんだから」と頑張る。やつとビストルを返した後は自分から「読んで」と絵本をもつてきた。

急に欠席が多くなったが久し振りにやつて来た。Nちゃん、Aちゃんと共に家まで送つた。家に入るなり「今までカバンしよつてどこいつた！」という大きな声。M君は土間に突つ立たまゝ。帰り道、Nちゃんたちが「Mちゃんお母さんに叱られて夜大通りの方へ行くのよ」と話してくれた。

母からひどい虐待を受けているため、恐くて自分から云い出すことを決してしない。学校に

すお金をもらうことも。

今日も黙つて来てしまつたらしい。彼には行先を云つて出かけるように、母には子どもの云うことを聞く気持を持つてくれるように話そうと思つた。

○十二月七日(木)

「来たよ」と自分から云いに来た。

勉強を始める前に園長夫人より次の事を伺う。

十一月に、夜遅くなつても帰らず搜索願を出しへッブサンダルのゴム屑の中に寝ているのをみつけたことがあつたが、十二月二日、学校へ出す百円を持つたまま帰らず、翌日、西新井大師の近くを歩いて

いるのを父親が発見した。更に四日の夜も帰らず、翌朝六年生の男の子O君(精薄児)といのを見つけた。夫人に「Oちゃんと映画をみておいしいおソバを食べさせてもらつて、夜は空家でよそのおじさんと一諸に寝た。学校でみんながバカと云うけれどOちゃんは云わないから好きだ」と云う意味のことを話した。

今日のM君はいつもと同じ、机を倒したり電気を消したり、勉強中、遊戯室へフラフラと行くので一諸に相手をする無心に遊んでいた。

彼にとつて「家」はどんな意味をもっているの

か。六帖一間に七人暮し、虐待の中で食事も兄と二人は別に与えられる。居場所もなく柱の横に突っ立っているのが精一杯の毎日。自分だけの場所を求めて家を出るのだろうか。

「みんながバカと云う」と云う言葉は、彼を認めてくれる人が誰もいなかったことを示しているようだ。今、必要なのは彼を認めてくれる人であり、話を十分に聞いてくれる人であろう。目にあまる行動で他人に及ぼす影響を考えて、たとえ抑えることにも追い廻されていたことを深く反省させられた。

○十二月十四日(木)

お菓子を食べていたM君は、戸の小穴から園児が棒をのぞかせていたのをみて、その穴からお菓子をあげている。リーダーがノートを出すと素直に勉強をはじめ、算数二十題を全部やった。「M君よく出来たね」とほめるとニヤニヤ笑っていた。

○十二月十六日(土)

皆、外へ遊びに出てリーダーと二人になる。何か紙片に書いてくれる。「ぜんぜいのぼがまんこうんこされ」。「M君のおりこう。先生は君が大好きです。おともだちになりましょう」と返事をかく。読み終えた彼の目は、一瞬光る。肩をすくめ上眼づかいにリーダーをのぞきこむ。この手紙ごっこは三十分間も続いた。一つのことになんか集中したのは初めて。その後、自分から「問題出してくれ」とノートを持つてきた。

自分を認めてほしい気持を精一杯表現したのだろう。前々からうかぶえたその気持をどんな風に受けたいか考えていたが、スムーズにいつて良かったと思う。帰り、初めて自分から家

族のことをいろいろと話す。一步、人間関係を進ませたことができたように思う。

○十二月二十一日(木)

先週算数を熱心にしたので「おりこうさんでしたね」という意味の手紙を出しておいたら「手紙ありがとう。お母ちゃんにもみせた」と云いに来た。しかしリーダーがM君のみをかまっていられなくなると、例によって窓から靴を投げこんだり大声で叫んだり。歳末助け合いで戴いたおもちやをプレゼントし家まで送った。道々、「おもちやみんな仲良く使うわね? Mちゃんだってお兄ちゃんたちがおもちや貸してくれなかったら嫌でしょ?」と話していたら、家につくとすぐ「これ使っていよ」と兄弟に差し出した。

よくなりつゝある関係が一週間のプランクでこわれてはと思い手紙を出したが、間接方法も又一つの方法だと思ふ。

M君には自分の所有を認められるものがない。みんな母の手を経て弟妹へ渡ってしまうのだ。「とられるからいやだ」という心配も当然だろう。彼の所有が認められるようお母さんとの話合いが必要に思う。

○十二月下旬一三十七年一月上旬

冬休み、M君宛三通、両親宛一通の便りを出す。

当分会えなくなるので間接方法を取り、手紙を書く。母の虐待は理性的欠如というよりも、貧困からくるドサクサな生活、周囲からの誤解、白眼視への感情的な抵抗の現われと考えられる。父親が母親の態度を責めると父親のいない所で子どもを虐待する。M君の健全な生活は本人の指導と共に両親の指導を行うことよって果さ

れるのではないだろうか。特に母親の立場を認め話し相手になることから出発する必要があるのではないか。とにかく、何でも話し合える親しい関係を作りたいと思つて両親宛にも手紙を出した。

○一月十一日(木)

久しぶりに顔を合わす。早速、手紙のことを云いに来た。「全部自分で読んだ。兄ちゃんがちよつと見ていた」と。

リーダーがM君だけの相手をしない時は相変わらずいたずら。K君、N君と共に家まで送る。まず母親が「手紙もらうばつかして返事もせずどうもすみませんね」という。父親もニコニコ笑つてお正月の話など自分からしてくれる。十分程立話しをする。

彼の印象が子どもらしくなり落付いてきたと他のリーダーがいう。手紙は期待した効果を發揮してくれたようだ。母親の照れくさそうな礼の云いようや、父が自分から話した態度、これは、相手を受け入れる気持があると解釈してよいのではないだろうか。両親との間が一歩近くなったよう嬉しい。

M君と良い関係がもてるようになって一ヶ月。やつとケースワークの糸口を把握できたところだろう。この頃では、母親も世間は自分に辛く当たるというような愚痴をこぼすまでになった。両親がどの子も同じように愛情を注いでくれるようになる日、それは決して近い日ではないであろう。しかしその日のくるまで、忍耐強く頑張らねばならない。

d これからの活動

この二年間のプログラムには勉強を中心に製作や

ゲームを取り入れ、子どもの自主性を尊重するよう心がけてきたが、技術面にのみとらわれる傾向が強く子ども会自体の性格づけを曖昧にしていた。さらにリーダーの自覚と認識に欠けるなどまだまだ多くの問題を含んでいる。週一回の研究会において、最近、その根本的なものとしてこの子ども会の在り方が問題にされ、

「児童及びその家族とリーダーとが良い関係を作り、そこから地域のニードをとらえ、この子ども会活動が地域福祉の一端を担う児童健全育成の一助となることを目標として進められるべきだ」と話し合われている。

現在その一手段として、家庭訪問、個人カードの作成を行っている。これらによって、活動をより効果的にかかっていきたい。

## B 図書クラブ

### a 活動状況

興野保育園の一隅に建っているオモチャのようなミゼットハウス、これが若葉図書館である。三坪程のこの建物の中には、事務用机と椅子が一组、折たたみ椅子六脚、それに本棚が三つひしめき、本棚はどれもぎっしりつまっている。

内職にはげむ母親が、寸暇の余裕を読書にたのしむと同時に、日常生活にも役立つよう、また児童の学習の一助ともなり、明朗なよい子が成長するようにとの私共のさゝやかな願いから、若葉図書館の設立と無料貸出しは始められた。

毎週土曜日、午前十一時から午後二時頃までの間が定期の開館時間である。開館と同時に子どもたちがドックと押しかけ、狭い図書館は蜂の巣をつついたような騒ぎになる。本棚から好きな本を取り出して

早速のぞく子、取合いをする子、大声をやたらと出す子……。

子どもの個人カードが作ってあるので借用を申出るとクラブ員は書名を記入する。このカードを通して子どもたちを知り読書指導の参考にすることができると。

最初二つだった本棚も現在三つ、各方面の寄贈、寄附をいただいたいて、現在小説類八〇冊、参考書類一三〇冊、雑誌その他二五〇冊ほど、量も種類もとにも増した。

### b 今後の問題

今後の活動についてはこんな風に考えている。地域の人々の要望に一層応え、地域的特殊性を十分に生かしていきたい。そのために、活動も週一回の貸出しからもっと地域を知り地域の人々と接触するよう考えられねばならない。付近の小学校の図書館見学や貸本屋を見歩くことを計画し、そこから種々のことを学びとった。貸本屋では低級なマンガの羅列に啞然とした。子どもたちの読書傾向も、雑誌、マンガが多くをしめ、全集ものでも高学年が低学年のものを好んで読む傾向がある。こゝに第二の問題を感じた。即ち、この子どもたちをどうしたら少しでも程度の高い書物に親しませることができらうか、どうしたらつまらないマンガよりも心暖まる美しい物語に彼等の目を向けることができるだろうかというのである。恐らく最も困難な問題であろう。

いま、あたらしい試みを始めている。それは二年別ぐらいの小グループを編成し、部員が本を読んだり説明をしたりして子どもたちがそれについて話し合う雰囲気をつくり、読書への興味を高めていく

方法である。そのために、紙芝居などのレクリエーション的プログラムを加えて楽しく自然なグループづくりをする方法もとられている。

問題はまだある。子どもたちの図書館利用者が増加したのに反し、母親の利用者が減少した。忙がしい日常生活の合い間に、フツと読みたくなるようなそんな本を常に備えておかねばならない。もつと母親と身近に接し、もつとその要望を適確につかまなければならぬ。

この図書館があくまでもこの地域のものであるよう、もつと地域の人たちが自分たちのものとしての自覚を高め、積極的に自分たちの手で発展させて行くよう援助し、共に歩んで行くようになることが終局の大きな目的であろう。

## C 老人クラブ「興野ニコニコ会」

### a 老人クラブへの願い

近年、平均寿命が著しく延長し老人の問題は世間の注目をあびはじめた。その老人問題といわれるものには大きく分けて二つの問題がある。一つは近代家族における扶養の問題であり、もう一つは古い時代に育ち生きた人が現代という社会の中で適応できずにとまどい、淋しい孤独な生活を送らねばならぬにいう問題である。老人クラブは第二の問題に対処するために起りつゝあるものである。元来イギリスに起った老人クラブの「老人自らが自分たちの経験を語り合い、孤独を慰めるために会合する」という自動的目的は、民主主義の地盤の弱い日本の老人たちに肌の合うものでは決してなかった。そのため老人クラブと称していても中味は従来の他動的敬老会と同じであったり、又は学校の教室を髣髴させるようなものが多かった。

私たちは興野町にクラブを育てたいと願った。勿論それがすぐ可能だとは思われない。リーダーとして育つべき人材は乏しく、社会性、自主性のない人々であり、しかもその前には「貧困」という大前提がある。それでもやはり、老人たちに許される経済的、時間的自由の中で、自ら人生を楽しみ、生きる張り合いをみつける老人になってほしいと願ったからだ。

b 今までの活動のあらまし

三十五年九月、保育園の祖父母を対象として「孫を教育する」と題して児童福祉司の講演会を開いたところ、保育園の強力な援助で二十名の老人が集った。そしてこれを老人クラブとして定期的に持つよう相談をもちかけ、熱心な協力者もでて承認された。しかし、その後は会の運び方も未熟であり、定期的に集まるには余りに多忙な人、こういう会に未経験な人、ニードの合わなかったと思われる人などは来なくなってしまった。リーダーの不足も相まって、一時は低迷状態を続けた。しかし、夏を越えた頃に一人の最も若いメンバーがリーダー格として育ち、新メンバーを誘い、一つのグループとしてまとまりつゝある。

プログラムは大きく分けて

- (1) 歌や踊り、ゲームなどのレクリエーション
- (2) やさしい製作（古ハガキでやかん敷を作ったりする）。

(3) 勉強会

といったものである。(2)は、手先をさびつかせないようにすると共に製作の喜びを味わい、作ったものを家に持ち帰ることにによってグループ意識を高めることを目的として試みている。(3)は、社会からと

り残されないようにリーダーが年金やクリスマス話などをする会で、クリスマスがどういう日なのか十四人中一人も知らなかったという実状にてらして組み入れたものである。

メンバーはすぐ、「私はできない」「私は頭が悪いから」という。これらの劣等感であると同時に自尊心の裏返しでもある行動に対し、決して上手にすることが目的ではないこと、あなたは十分よくできていることを強調し、自信をつけるように努めてきた。そして現在、何の遊び方も知らずむっつりしていた老人が次第に意見を云い、笑うようになってきた。

九月十五日はとしよりの日。生憎、試験直前であったため、一枚五十円の美しいカードを送って会にかえることにした。

○年令

年令	60才未満	61才-65才	66才-70才
人数	1	3	1
年令	71才-75才	76才-80才	81才-85才
人数	4	5	2
年令	86才-90才	不明	
人数	1	3	

※平均年令 73.4才

○学歴

学歴	人数
小学校(四年制)卒業又は中退	5
不就学	15

○家庭の職業

職業	人数
農業	6
会社員	2
商業	2
その他	10

○家族構成(代表的例)

会員	家族構成
例1 Uさん	86才女 子ども三人病死、49才の息子(失対労務者)と二人暮らし
例2 Uさん	79才女 中農 息子夫婦、孫夫婦、ひこ孫、未婚の孫、と四代九人世帯
例2 Nさん	74才女 一人暮らし、息子に小さな家を建ててもらい、仕送りもうけている。

△△さん、その後お元気ですか。九月十五日は「としよりの日」国できめたお年寄りのための祝日です。

お年寄りにとって住みよい社会が一日も早くくるように、そしてあなたが末永く御達者でありますよう祈りながらこのカードをお送りします。

△△様

日本女子大学社会福祉学科

興野町セツルメント老人クラブ

十月には念願の会名も「興野ニコニコ会」と決定した。これは自分たちで考え出すのを長い間期待していたのだが、遂にそれは無理と判断して用意したもののなかからメンバーが選んだものである。なお、活動は月一回二時間、会費は二十円で茶菓代に当てている。また会員の数は、現在二十名である。



#### ○ 家庭訪問から

会員のニードを把握するためには家庭を知らなければならぬと考へ家庭訪問を始めたのは昨年五月であった。初めての家には園長夫人からリーダー格の会員に案内を頼み、抵抗なく受入れてもらえるよう苦心した。三十分でも一時間でも話をする人もある。

その話の中から、その会員の生活のすべて、生活歴などの殆んどを把握できた。個人カードをこれによって作成した。この訪問を例会の一週間前に行うようにし、出席を確実にすることに効果をあげ、また、会員とリーダーの人間関係をより親密にすることができた。訪問によって気が付いたことは、ボーダーライン層に属すると思われるのは極く少数で他は安定した家庭にあり、客観的に特に不幸な状態にはないと思われることである。こういう層が集まっていることの意味は正確に理解せねばならないが、とにかく現在は貧民である故の問題より、一般的老人問題としてとらえるべきなのではないかと考えさせられた。

#### 四、研究会活動の発足

興野町セツルメントの福祉活動として子ども会、図書クラブ、老人クラブがその歩みを続けているが、これらの活動は開始の期を異にし活動も独自に行われていた。しかし実際の活動を通して、一つの統一的な機構としての活動がなされる必要性を感じ、反省会に意見が出されて改革案が考えられた。即ち、興野町セツルメント福祉活動部とし、三クラブをこれに所属させ、部長一名がこれを統括し、各クラブから一名の責任者がでて運営委員会を構成し諸連絡をはかることにした。

一方、毎月一回、活動の向上をめざしての活動部全員による研究会を発足することにした。先ず第一歩として、地域を知ることと目的として足立区役所、福祉事務所、児童相談所への訪問、民生委員との懇談会を行い、六月末に研究室の先生方と共に総括をした。

第二步として、セツルメントの意義についての研究を始め、併行して、個人カードの作成を計画し十二月より一月にかけて家庭訪問を行った。

また、十月に行われた目白祭には「足立区興野町における私たちの福祉活動」と題して発表し、セツルメントの意義、私たちのセツルメントの現状等を写真で展示説明した。全員の分担、協力によってまとまった活動とすることができたことは、いろいろな面でプラスとなった。

その他、リーダー間のチームワークを強化するために一泊二日の合宿訓練を行ったこともある。一つの組織として強力な活動を続けるための精神的なエネルギーの源泉としての役割を、この研究会に期待するのである。

#### 五、活動をふりかえつて

—— 今後の課題 ——

セツルメント活動はかくて一年半を経過した。その間、その活動は、終始、トライアンドエラーの連続であり、常に壁に頭をぶつけているような行き詰りの状態であったような気がする。しかし、私たちは私たちがなりに、そこから常に問題を感じとり、検討し反省しつゝ真剣にとりくんできたつもりである。こゝに、この稿のまとめとしてその問題点をあげ、それに対する考え方を述べて、今後への歩みのいし

ずえとしたい。

問題点の第一は、目標に対して活動の本質は、如何にあるべきかということ。活動によって地域に直接触れ、対象をより深く知ることが出来るようになった。しかし科学的な裏付けによる把握がなされていないため、真のニードを見逃す恐れがあり、更に大きな社会機構や地域にとって、決定的条件である「貧困」ということそれ自体に対する広い理解を欠いている。そのため、我々が行っているあらゆる活動が上すべりのものであり、目標に対して空まわりしている感情につねに脅かされる。

確かに、子ども会なり、図書クラブなり、老人クラブなりは、それぞれに地域の福祉と生活上のたぐひに、必要と思われるものであり、現につねに目前にはいくつかの問題が横たわっており、それをとりに除こうと熱心な活動を行っている。しかし、もつと大きな立場からその目標を考えたとき、そうした真剣な活動さえも何の役に立ちはしない。必要なのはもつと他にもつと大きく存在するのではないか、我々の活動はこれといふのかという疑問がつきまとって離れない。

問題の第二は、設営場所をめぐる種々の問題である。セツルメント活動をはじめた興野町は、場所としては十分に意義の認められる地域ではある。しかし、大学から往復三時間を費やさねばならない。そのため時間的、肉体的制限が活動にいくつかの影響を及ぼしている。即ち、その①は、やらなければならぬこと、やりたいことが山積しているにも拘わらず、時間的な余裕が十分にとれず、必然的に活動に制約が加えられること、その②は、時間的、肉体的負担が大きく、それに耐えかねて退部する学生が多



いことなどである。学生の活動も課外を利用してのものであり、自由に時間を駆使することができないために活動の必要性といくつかの制限との間に立つて苦しむのである。

以上、挙げたようなわれわれの側の問題をかゝえながら、とにかく対象が現にあり、援助を与えねばならない問題が目に見えているとき、つたないながらも続けていく活動が何らかの効果があるのなら、私たちはやはり学びながら活動していかなばならないと考える。そのために、今後は巨視的な立場から遠く将来への活動の道を確認しつつ、多くの問題をそらさずの一つ一つ着実にとり組んでいく姿勢を確立し堅持することに努めたい。そして具体的には次のようなことから意欲的にすゝめたいと考えている。

まず、家庭訪問や地域の諸団体、諸機関との協力を更に押し進め、活動の経験を通して対象を正確に理解し、ニードの把握に努め、現在の三つのパートは着実にその方向を進めるよう努力する。さらに、現在欠けている母親や青年層という地域向上の有力なエネルギーとなる人々を組織化することができれば、もつと深く地域に入りこむことができるのではないだろうか。そして、基本的には一つ一つの具体的な目前の問題を広く社会的な意義づけをすることを忘れないように特に注意していきたいと思う。地味だがしかし、着実に浸透していくよう、さらに諸団体と共に地域の向上に努めるように。そして、その過程が私たちに得がたい体験として成長の糧になることを信じている。

おわりに、このセツルメントの活動によせられる、学内及び学外、桜楓会の多くの人々の暖かい御協

力と御支援に対し、心からの感謝を申し上げますと共に、今後とも重ねて、よろしく御指導、御鞭撻下さいますようお願い申し上げます。